

# 描かれた18世紀のアテネ

## —ジェームス・「アテナイ人」・スチュアートの風景画—

増子 美穂

### [キーワード]

ジェームス・「アテナイ人」・スチュアート、『アテネの古代遺物』、ギリシャ復興

## 1. はじめに

18世紀の英国で活躍した建築家ジェームス・「アテナイ人」・スチュアート（James ‘Athenian’ Stuart 1713–1788）は、ギリシャ様式を取り入れたメダルから建築のデザインまで幅広く手がけ、英国における新古典主義の先駆的存在として知られている。彼の最も輝かしい業績は、建築家ニコラス・レヴェット（Nicholas Revett 1720 – 1804）とともに、アテネに滞在し、初めて古代ギリシャ史跡を実測そして記録した『アテネの古代遺物』*Antiquities of Athens*（vol.1:1762, vol.2:1789, vol.3:1794, vol.4:1816）の出版である。その詳細なスケッチは、その後の考古学研究の方法論の基礎となり、英国の建築、絵画、工芸、庭園デザイン他、ギリシャ様式の復興と発展の出発点となった。

実測図で名を馳せたスチュアートだが、『アテネの古代遺物』には実測図の他に数多くの眺望図が挿入されている。これらのアテネの風景画には、古代ギリシャの遺跡が聳える歴史的景観を背景に、人々の営みが生き生きと描かれている。スチュアートが描いた当時のトルコ支配下のアテネの街並みには、明らかに同時代の他の画家たちが描いたアテネの光景とは違う様相があり、異文化を新しい視点で捉えたスチュアートの独自の眼差しを示唆している。通りすがりの旅行者としてではなく、アテネに4年間居住した画家の目に映った光景には、18世紀の人々が想像するギリシャとはかけ離れた現実があった。本稿では、ギリシャ様式の建築家・工芸デザイナーとして知られるスチュアートの画家としての功績を見出し、風景画家としてスチュアートを捉え直す。そして、風景表現に込められたリアリズムの眼差しを明らかにすることを目的とする。

## 2. 画家としてのジェームス・スチュアート

スチュアートは、1713年にロンドンのスコットランド人船乗りの息子として生まれた。幼い頃から絵の才能があり、父親が亡くなった後、ロンドン在住のフランス人画家ルイ・グーピー（Louis Goupy, 1675?-1747）の許で、当時ロンドンで流行っていた扇絵を描き、母親、弟と二人の妹を支えた。グーピーは、バーリントン卿の初めてのイタリアへのグランドツアーに同行した経験があり<sup>1</sup>、古典建築物を描いた扇で人気を博していた。グーピーの作風は、スチュアートが古美術への関心を

持つきっかけとなっている。母親の死後、1742年にスチュアートは長年の夢だったローマへ移り、英国人旅行者のための絵画鑑定やツアーガイドをして暮らした。銅版画の技法を身につけ、1749年には新発見されたアウグストゥス帝のオベリスクの素描を描き、アンジェロ・マリア・バンディーニ（Angelo Maria Bandini 1726-1803）の『アウグストゥス帝のオベリスク』*De Obelisco Caesaris Augusti e Campi Martii ruderebus nuper eruto*（Rome 1750）の中で紹介された<sup>2</sup>。

スチュアートがローマに移住した同じ頃、サフォークのジェントリーの息子だったレヴェットもローマへ渡り、ボローニャ派の画家マルコ・ベネフィアル（Marco Benefial 生没年不詳）の門下生となった。二人は意気投合し、英国貴族向けに古典彫刻のディーラーをしていたマシュー・ブレッティンガム（Matthew Brettingham 1725-1803）、そしてスコットランド人画家でコレクターのギャヴィン・ハミルトン（Gavin Hamilton 1723-98）とグループを結成する。1748年4月、4人はナポリへ調査旅行に出かけ、古代ギリシャの遺跡を学術的に記録する構想を練った。

当時、古典建築の現地スケッチを収録した出版物については、1676年にフランス人医師で考古学者のジェイコブ・スポン（Jacob Spon 1647-1685）が英国人聖職者で植物学者のジョージ・ウェラー（George Wheler 1651-1724）とともにギリシャを訪ね出版した『イタリア旅行』*Voyage d'Italie, de Dalmatie, de Grece et du Levant*があり、本書で初めてパルテノン神殿が紹介された。ウェラーはこのパルテノン神殿の眺望を1682年に出版した『ギリシャへの旅』*Journey into Greece*（図1）の中でも紹介しており、本書は英国王チャールズ2世に献上された。

スポンのギリシャ行きは、ルイ14世の財務大臣コルベール（Jean-Baptiste Colbert, 1619 - 1683）が支援したものだ。王立建築アカデミーの創始者だったコルベールは、フランス人建築家向けの古典建築の学習に情熱を傾け、同じ時期にアントワーヌ・デゴデ（Antoine Desgodetz 1653-1728）による『現場で正確に実測し描かれたローマの遺跡』<sup>3</sup> *Les edifices antiques de Rome dessinés et mesurés très exactement sur les lieux*（1682）を企画している。Desgodetzの手法は、建造物の平面、立面、列柱装飾の実寸などが正確に測定されており、本書は長らく古典建築の基礎資料となっていた。スチュアートらはこのDesgodetzの手法を用いて、ギリシャ建築版を製作し

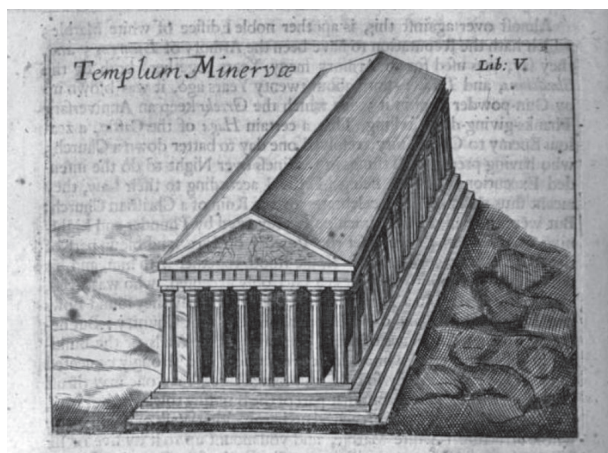


図1 《ミネルヴァ神殿の眺め（パルテノン神殿）》  
George Wheler, *Journey into Greece*, Book V,  
London, 1682, p.360

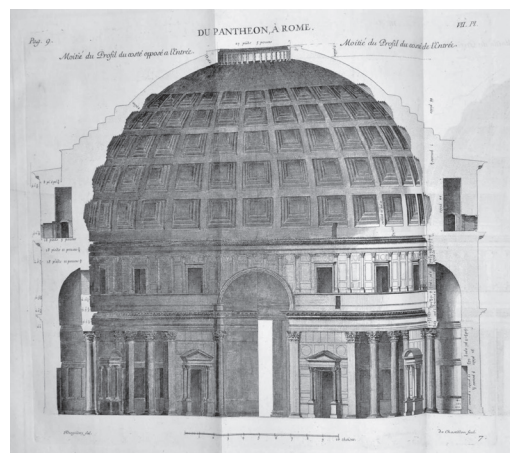


図2 《ローマのパンテオン》 Antoine  
Desgodetz, *Les edifices antiques de  
Rome dessinés et mesurés très  
exactement sur les lieux*, Paris, 1682 p.38

ようと計画した。(図2)

当初の構想によると、ギリシャに1年滞在し、その後3年かけて現地スケッチを銅版画に写し、出版する計画だった。書籍は全3巻構成で、1巻目は53箇所のギリシャ遺跡の眺望、2巻目は実測による建造物の平面・立面など詳細図面、3巻目は67点の彫刻図面を収録する予定だったが、<sup>4</sup>この計画は遺跡ごとに分類する実用的な手法に変更された。

その後、ハミルトンとブレティンガムはグループから抜け、スチュアートとレヴェットはスポンサーを探すべくヴェネチアでディレクタント協会の設立メンバーの一人である準男爵ジェームス・グレイ<sup>5</sup>と英国領事ジョセフ・スミス<sup>6</sup>と知り合う。熱心な好古家で、協会の精神を指導する立場にあったグレイは、二人の企画に大いに賛同した。正式にディレクタント協会の後ろ盾を得ることに成功し、調査旅行は1751年1月から1755年1月の4年間かけて行われた。そして、その成果物である『アテネの古代遺物』が出版されたのは7年後の1762年だった<sup>7</sup>。

スチュアートにとって、自分自身は常に画家であり、建築家ではなかった。前述の通り、彼は建築一家の生まれでも建築の専門教育を受けたわけでもない。彼がヴェネチアでアテネ行きを待機していた1750年の春から初夏にかけて、北イタリアの風景や建築物のスケッチを70点収録した画帳がRIBA(王立英国建築家協会)に残されている。全体の半数のスケッチは、パツラーディオ様式の建築物を描いた風景だが、あとはヴェネチア派の研究に費やされ、特に絵画に見られる「光、影、量塊、材質感、色相、演出」に関心を示している<sup>8</sup>。

『アテネの古代遺物』には、実測図とともに、実地でスケッチされた遺跡の周辺風景も収録されている。風景画の挿入はデゴデにはなかった新しい試みで、スチュアートの画家としての自負を感じさせる。『アテネの古代遺物』の各章は遺跡を遠景に望む当時のアテネの風景から始まり、建造物の概要解説、次に周辺の風景を含めた眺望図、さらに外観図、断面図、平面図の他に基礎、床、壁、天井、屋根など主要部の構造、寸法を書き加えた図面が続く構成となっている。スチュアートは序文で「全ての眺めはその場で完成され、他の何よりも真実を優先した。その場所の見た目を重視し、いい絵に仕上げようというような、画家が陥りがちな、身勝手な自由奔放さは一切ない」『アテネの古代遺物』(vol.1, p.viii)と記している。書籍の目的は、当時のありのままの姿のアテネを表すことにあり、この点において風景を描く際に、理想化してしまう18世紀的感覚とは一線を画すものである。

スチュアートがアテネで残した77冊のデッサン帳は、先述のRIBAに所蔵されているスチュアートの小さいスケッチブックの他、2冊のみ現存している<sup>9</sup>。そのうちエディンバラ大学図書館蔵の画帳のタイトルには「画家そして建築家であるジェームス・スチュアートによる古代建造物の正確な描写」と記載されている<sup>10</sup>。エディンバラ本には、1750年夏にスチュアートとレヴェットが行ったポーラ神殿の調査が収録されているが、スケッチとともにスチュアートによる遺跡やその周辺環境を記したエッセイ、古典文学からの引用で埋め尽くされている<sup>11</sup>。1750年代にすでにスチュアートの興味関心が遺跡の実測の他、風景描写にあったことは、大英博物館蔵のポーラ神殿のスケッチからも確認できる。現場でペンとインクを用いながら、ポーラ神殿の内部が周辺の風景を眺望する構図で描かれており、光による陰影を薄いグレーのグラデーションで表現している。スチュアートが光に興味を持ったのは、調査のための測定から、その結果を解析して数値や幾何学の体系を解明しようとする「視点」の数学的分析一環と見ることができる、という分析もある<sup>12</sup>。

調査の際、内向的な性格だったレヴェットは主に計測に力を注ぎ、かたやスチュアートは周辺環境や遺跡の状態をメモするのに必死だった。二人の間の作業分担において、レヴェットが「建築家—考古学者」を目指し、スチュアートは「地勢図士—考古学者」的な立場だったと考えられる<sup>13</sup>。

スチュアートは1755年、英国に帰国後、セント・マーティンズ・レイン・アカデミーの芸術家サークルに参加し、ホガースやレイノルズと親交を深めた。スチュアートは現地調査の成果をかざし、自身を建築家兼画家として二足のわらじを履く芸術家であることを宣伝した。1758年に王立協会 Royal society の会員に選出された際には、「歴史画家であり建築家」、そして同年、古物協会 Society of Antiquaries に選出された際にも、「画家であり建築家である」と記している<sup>14</sup>。

彼の画家としての業績をいくつか挙げると、最初の仕事は、ロッキンガム・クラブ（所在地不明）のためのウィリアム3世とジョージ2世の肖像画だった<sup>15</sup>。この他、1763年、ディレッタント協会の肖像画家となるが、依頼された肖像画を一枚も描けなかったため1769年にレイノルズに画家としての地位を譲っている。また、1764年にはホガースの後任として建設局 Office of Works<sup>16</sup>の宮廷画家になった（1782年まで在任）。さらに、芸術・製造・商業振興協会など20以上の委員会にメンバーとして名を連ね、絵画やデッサンの審査員も務めている。1765年から1783年にかけて、デザイン画、本の挿絵、神話や寓話を題材にした絵画など122点の作品を自由芸術家協会 Free Society of Artists<sup>17</sup>に出展した。しかし、残念ながらスチュアートの油彩画は現存せず、『アテネの古代遺物』に採用されたグワッシュ画を通してのみ風景画家としてのスチュアートを知ることができる。

### 3. 『アテネの古代遺物』の風景画

RIBAには、スチュアートによる20点のグワッシュが収蔵されており、その中の18点が『アテネの古代遺物』1-4巻で採用されている<sup>18</sup>。18点のうち5作品は、ポーラ（現在クロアチアのプーラ）のローマ時代の遺跡、13作品はアテネとテッサロニカの遺跡を描いたものだ。序文でスチュアートは、風景画は「その場で完成」した、と記しているが、スケッチと完成作が若干違っていることから、これらのグワッシュは、ロンドンに帰国後、アトリエで仕上げられたと考えられる<sup>19</sup>。

ギリシャは、西洋文化の源泉でありながら、当時オスマン・トルコの支配下にあり、多くの西洋人にとっては全く未開の地であった。大半のグランドツアーはイタリア止まりで、ギリシャまで足を運べたのは、ほんの一部の勇猛果敢かつ金銭的、政治的に支援者がいる旅行者のみだった。スチュアートの風景画には、ギリシャの雄大な自然の中、古代遺跡とともにトルコの建物、そしてその地で生活を営む市井の人々が生き生きと描写されている。精細で色鮮やかに描かれた近代ギリシャの光景は、書物でしかギリシャを知らない人々にとって大きな衝撃だった。

スチュアートの風景画の特徴について、Bryant (2007) は、グワッシュで描かれていること、扇絵のような構図、近代ギリシャの風俗を描いていることなどを挙げている。グワッシュ（不透明水彩）は、水彩と油彩の中間的存在で、絵具が紙の支持体に浸透することがある点で水彩画に似ているが、絵具で表面的な層を形成し、不透明な描き方もできるという点で油彩と似ている。18世紀当時、商業用絵画によく用いられた技法で、扇絵師の経歴があるスチュアートは水彩よりもグワ

ッシュの方に親しみがあつたと考えられる。また、グワッシュはフランスやイタリアの大陸的な技法とされ、特にグランドツアー旅行者の観光名所絵などで使用されていた。チューブ式油絵具が出回る19世紀以前の時代、グワッシュは、作品を素早く仕上げるために便利なため、現場の記録を重視したスチュアートにとって最適な画材だった。しかし、18世紀の英国ではまだ画家たちが真剣に使用していない画材だったため、スチュアートの作品は純粹芸術として真剣に扱われなかった可能性がある。

現地取材に拘ったスチュアートは、実測を進めながらアテネの様子をつぶさに観察し、「風景の記録」を行った。その視線は、18世紀当時の画家たちが持っていた理想的風景の型にとらわれず、むしろ近代的なルポルタージュの精神に近いと考えられる。本稿では、スチュアートの風景画の1)眺望の構図、2)人物の描写、3)光と影の表現について分析し、そのリアリズムの精神を明らかにする。

### 3-1 眺望の構図

風景画の構図において、スチュアートは画面中央に高い建造物を描き、背景に山や森があるパノラマ的眺望、そして前景に人物たちを点在させている。グワッシュ画に見られる色鮮やかに事物を描く手法、建築物や人物などの要素を半円形に配し、さらに逸話的な場面展開に仕上げる構図は、扇絵によく見られる描き方である。

『アテネの古代遺物』に収録されたスチュアートによる眺望図は、第1巻に6点、第2巻に7点、第3巻に10点、第4巻に7点あり、大きく3つに分類することができる。1)パノラマ的トポグラフィ（地勢図）、2)遺跡を中央に捉えた風景図、そして3)風俗図である。

『アテネの古代遺物』の第1巻と第2巻の冒頭は、タイプ1)パノラマ的トポグラフィから始まる。第1巻はアテネと周辺地域が描かれている。アンケシムス山の麓からサロニコス湾、サラミスの島々、エギナ島、ペロポネソスの海岸を捉えている。画面の周辺にアルファベットが記載され、描かれた各部分の解説がテキストになっている。「ハドリアヌスの水道橋の廃墟」<sup>20</sup>の下でアテネのトルコ行政官 Hassan Agà や市の重鎮たちとその使用人が狩の準備をしている。眺望図は、当時英国で隆盛を誇ったトポグラフィ版画と同様に、高い視点から現地の地形、山々、海岸線や陸地の高低がわかるように設計されている。しかし、スチュアートの関心は、詳細な地形描写だけでなく、手前の人物群に向けられている。『アテネの古代遺物』のテキストには、風景の解説に加え、以下のような記述がある：「アテネの人々は、トルコの占領地の中でも最も活発であり、能力が高く礼儀正しい。現在抑圧されているものの、野蛮で冷酷な行政官が彼らにどんな苦役を課そうとも、偉大な勇氣と洞察力で立ち向かうだろう。実際、我々が滞在中に、彼らは計画を立てて、3人の行政官をゆすりと悪政を理由に解任させている。」(vol.1, p.x) 記述は、現代アテネの人々の日常生活、趣味趣向、外観、ファッションへと続く。

同様に、第2巻の冒頭にもアクロポリスの丘と背後に山々をパノラミックに捉えた眺望図がある。トルコ行政官たちが騎馬競技 Jereet を楽しむ様子とともに、その後方で馬上で語らうトルコの有力者とアガが描かれている。第3巻には、パノラマ眺望図ではなく、自然風景のみを描写した風景画が収録されている。空が高く捉えられ、ギリシャの山々と雄大な草原の眺望は圧巻である。

タイプ2)遺跡を中央に据えた風景図は本書の中で最も多い。《コリントのアポロ神殿の眺め》

View of the Temple of Apollo at Corinth では、前景の左側に二人の馬に乗った男性、中央に散歩する二人の女性、そして右側にカード遊びをしている人物が描かれている。アポロ神殿を後景中央に配し、左右の人物群を結ぶ緩やかな半円となり、扇絵の典型構図である。しかし、画面中央の神殿に光を当て、左側の樹木や右端の影によって空間を囲う画面構成は、伝統的な理想風景画の構図とも言うことができる。

眺望図のうち視界が最も広く取られた第4巻に採用された《ポーラの円形劇場、西側から》View of the Amphitheatre at Pola from the west、と《ポーラの円形劇場の内部》View of the interior of the Amphitheatre at Polaにおいて、半円形的画面処理が見られる。空を大きく捉え、遺跡と同等に空の存在感を際立たせる手法は、装飾絵画を超え、アテネの空気まで感じられる点では観光名所絵の典型スタイルである。

タイプ3) は、スチュアートの独自の観察眼と取材の成果である。《アテネ市街》Doric Portico of Athens (vol.1-1) (図4)、《リシクラテスの記念碑》Choragic Monument of Lysicrates (vol.1-4)、《ミネルヴァ神殿》Temple of Minerva, Acropolis (vol.2-1)、《エレクテウス神殿》Temple of Erechtheus, Minerva Polias, Pandrosus (vol.2-2) (図7)、《バッカス劇場》Theater of Bacchus (vol.2-3)、《テセウス神殿》Temple of Theseus (vol.3-1) (図5)、《サロニカの廃墟》Ruin at Salonicha, called the Incantada (vol.3-9) などが挙げられる。対象を近くに捉え、アテネの人々と同じ目線に立ち、生活を記録する視点は、グランドツアー客に人気の都市景観図や当時の西洋人が残した旅行記にはないものであり、特筆に値する。

### 3-2 人物の描写

『アテネの古代遺物』の最も大きな功績の一つが、古代遺物の実測とともに、当時のギリシャで生活する市井の人々の様子を伝えている点である。グワッシュの眺望図に登場する人物たちの多くは、現場で描かれたのではなく、後でアトリエで付け加えられた可能性が指摘されている。英国でスチュアートは画家のジェームス・バリー (James Barry 1741-1806) を助手として雇っており、記録には残されていないが、グワッシュ画には数名のアトリエ助手による加筆が認められる。<sup>21</sup>

例えば、第1巻第2章 pl.1 の《イリススの神殿の眺望》View of the Temple on the Illisus で、



図3 《イリススの神殿の眺望》、ジェームス・スチュアート、ニコラス・レヴェット『アテネの古代遺物』(vol.1-2) 1762



図4 《アテネ市街、背景にアテナ・アルゲティスの門》、ジェームス・スチュアート、ニコラス・レヴェット『アテネの古代遺物』(vol.1-1) 1762

大英図書館に残されている現地で描いたスケッチには、ペンとインクによって神殿の外観と背景の山々が素早い筆致で描かれている。グワッシュ画、そして出版された銅版画（図3）には、馬に乗って狩に出かける在アテネのトルコ行政官と付き人、そして中景に狩猟犬が描かれている。スチュアートは『アテネの古代遺物』の冒頭で、「これらの眺望で描かれた人物は、実際の場面からとったもので、現在のアテネの住人の装束や容姿を表した」（vol.1,p.viii）と記している。作品は、スチュアートらがいたアテネの特定の時期を示すもので、人物たちの存在感はギリシャにおけるトルコの支配を強く感じさせる。これらの人物の挿入は、遺跡の実測には不要であり、また、地勢図としての風景にも特に必要がない。トルコの行政官の存在にはスチュアートの明確な意図が感じられる。

トルコの行政官は他の眺望図にも登場する。《アテネ市街》（図4）では、アテネのローマ時代の門が描かれている。脇のフランス領事館の前でトルコの行政官、フランス領事とギリシャ人商人が語らっている。手前には、馬に水を飲ませている武装したトルコ兵と、水瓶を持って怯えながら順番を待つ女性が描かれている。

さらに《テセウス神殿》（図5）では、古代神殿を臨む雄大な景色の手前に、アルバニアの小作人がとうもろこしを吹き分けている。傍では、主人の息子を連れたトルコ人召使が威圧的に命令を下している。スチュアートは図版解説で「ここに描かれているアルバニア人はギリシャの農民で、ギリシャの伝統的なキリスト教徒である」（vol.3, p.5）と記している。いずれの図も政治的メッセージは明白であり、美しいだけではないギリシャの現実が記録されている。

同時代の風景画には、前景に小さな人物が描かれていることが多い。これは、17世紀の理想風景画からの影響であり、雄大な自然の前景にギリシャ神話や聖書物語を描く風景画の描き方を模範としている。季節は夏、明るい日差しと森の緑が鮮やかな季節で、前景には笑い語らう羊飼いや神話の人物たち、中景に遺跡など建築物と水辺、背景に山々は理想風景画の典型要素である。理想風景画はグランドツアー旅行者の熱心な収集品となったが、旅行者をターゲットとした多くの観光名所絵もこの構図を踏襲した。

同時代にアテネの風景を描き、スチュアートのライバルとなったフランスのジュリアン＝ダヴィッド・ルロワ（Julien-David Le Roy 1724-1803）も『ギリシャの最も美しいモニュメントの廃墟』*Les Ruines des plus beaux monuments de la Grèce*（vol.1:1758, vol.2:1770）で壮大なギリシャ神殿



図5 《テセウス神殿》、ジェームス・スチュアート、ニコラス・レヴェット『アテネの古代遺物』（vol.3-1）1794



図6 《テセウス神殿》、ジュリアン＝ダヴィッド・ルロワ『ギリシャの最も美しいモニュメントの廃墟』1770

の麓に小さい人物を描いている。画面いっぱいにそびえる神殿の下に描かれたトルコ風の人物は劇の一場面のようなポーズをとり、異国趣味を満足させる飾りのひとつにすぎない。ルロワの作品は、18世紀のヨーロッパの人々がイメージするギリシャを忠実に再現したものだった。ルロワは、当時の美学に則り、主題は実像に優り、正確な描写よりも雰囲気重要であると考え、意識的な演出を優先させている。彼は、アテネの遺跡をペリクレスの時代以前とアテネ黄金期以降の2つの時代に分類し、近代アテネには興味を注いでいない<sup>22</sup>。

同時期にアテネに滞在したルロワは、スチュアートとレヴェットがアテネの本を準備していることを知っており、彼らよりも早く出版することを狙っていた。フランスは当時トルコと良好な関係を築いており、ルロワは有利な立場で調査を遂行することができた。わずか3ヶ月でアテネの調査を終わらせ、潤沢な資金のもと最高の建築家と彫刻家によって、至急イラストが制作された。ルロワの第1巻は、少なからずスチュアートとレヴェットにとっては衝撃だったと考えられる。ルロワのイメージ先行型の描写に対抗するため、スチュアートは、テキストを全て書き直し、当初よりもっと詳細な実測値とスケッチを収録する計画に変更し、ページ数が膨らみ、さらに完成まで4年を要してしまった。

ルロワの古代を理想化した視点も、スチュアートが意識したところである。ルロワの描くアテネは、ドイツの美術史家ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン（1717-1768）の古代美術の理想美をイメージ化したものだった。ヴィンケルマンは、ギリシャに足を踏み入れたことはなかったが、ローマで古代ギリシャ美術を研究し、「高貴なる単純と偉大なる静寂」（『ギリシャ芸術模倣論』）と表現し、美のアイデアは古代ギリシャにあるとした。当時、ルロワの理想化した古代ギリシャのイメージは芸術と建築に大きな影響を与え、同じくローマの古代遺跡の版画で人気を博していたジャン＝バティスト・ピラネージ（1720 - 1778）の「イタリア派」と対立する「ギリシャ派」が主流になるきっかけとなった。スチュアートはルロワの本にはなかった、「現代」を描くことで、古代遺跡の現実を伝えようと考えたのだ。

スチュアートはルロワの描写の虚偽を鋭く批判したため、1770年にルロワは、第2版を発表した際に反撃に出て、スチュアートたちのギリシャ遺跡は、「寸法が正確なだけ取り柄」であると序文に記している<sup>23</sup>。18世紀の人々の古代への理想がアテネの風景画に求められる一方で、スチュアートの正確なアテネを伝えるルポルタージュ的眼差しには、同時代としては先進的な写実主義



図7 《エレクテウス神殿》、ジェームス・スチュアート、ニコラス・レヴェット『アテネの古代遺物』(vol.2.2) 1787

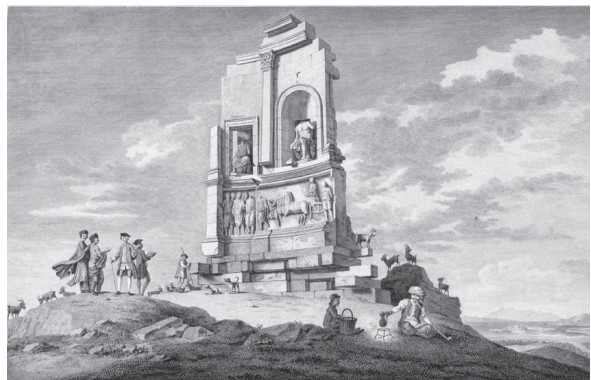


図8 《フィロパポスの墓碑》、ジェームス・スチュアート、ニコラス・レヴェット『アテネの古代遺物』(vol.3-5) 1794



絵画の傾向が見られる。

もう一つの重要な特徴として、スチュアートの風景画には、現地で実測やスケッチをする自分たちの姿が描かれている点が挙げられる。《バックス劇場》(vol.2-3)には右端でトルコの衣装を着て神殿をスケッチするレヴェットの姿がある。トルコの衣装を着ているのは、警戒されないよう現地に溶け込む必要があったためである。

スチュアート自身は、《エレクトウス神殿》(図7)でトルコ風衣装を着てカリアティドをスケッチする姿で登場する。スチュアートが雇った作業員たちがカリアティドの下を発掘しているが、トルコの役人やスパイが見張っている。当時、西洋人がトルコ領内で調査活動をする際には、「護衛」を建前としたトルコ人スパイがつくことが通例で、発掘の際に遺跡を持ち逃げされることを警戒していた。

《ポーラ神殿》(vol.4-4)では、二人はセルゲイの門の天辺に立ち、スチュアートはノートを取り、レヴェットは遺跡を実測している。足元が不安定な中、実測を前に二人はどんな危険な作業も厭わない。

《フィロパポスの墓碑》(vol.3-5)(図8)では、スチュアートとレヴェットはトルコのカフタンを纏い、ジェームス・ドーキンズとお喋りしている傍で、ロバート・ウッドが碑文を書き写している<sup>24</sup>。この作品で興味深いのは、コーヒーを入れる使用人が版画には描かれているのに対しグワッシュ画の方では描かれていないことだ。これはグワッシュ画が、版画制作の後に英国で製作された証拠で、スチュアート以外の人の手が作品に入っていることも示している<sup>25</sup>。自分たち自身を作品に描きこむことは、彼らが実際にギリシャにいたことを証明するものだった。

スチュアートはまた、発掘作業をしている作業員も描いている。図7の他にも、《風の塔》(図9)では、入り口扉部分を懸命に発掘する作業員が描かれている。彼らは、建物内部に入り込んだ大量の土砂を取り除き、元の地表高さまで約4m掘り下げた。遺跡の八面全てを記録するために隣の家まで壊している。徹底した発掘作業のおかげで、スチュアートたちは、この塔が水時計であると発見した。

遺跡の全容とともに発掘作業の過程を記録した風景図は、このプロジェクトがただの「旅の記録」ではなく、真剣な「調査研究」であるというスチュアートのメッセージと受け取ることができる。



図9 《風の塔》、ジェームス・スチュアート、ニコラス・レヴェット『アテネの古代遺物』(vol.1-3)、1762

### 3-3 光と影の表現

『アテネの古代遺跡』の風景画には、スチュアート独特の光と影の表現が見られる。ギリシャの強い日差しは、英国の薄暗さに比べ、かなり強い。全てのものを明るくはっきり映し出す光に照らされた遺跡は、眩く、神々しくさえ感じられたであろう。スチュアートのグワッシュ画に描かれたアテネは、季節を問わず空は青く、太陽が地上を明るく照らしている。特に古代遺跡の白を強調し表現することで、ヴィンケルマンの理想とする古代ギリシャの美を証明した。

《イリススの神殿の眺望》(図3)では、青空を背景に遺跡が白く輝いている。かつての栄華を象徴する堂々とした佇まいだが、その明るさを強調しているのは手前右側から画面左方向にかかる影である。手前を樹木や建築物で囲い、暗い部分を作ることで、中央の明るい光景に焦点を当てる手法は理想風景画に見られるが、ここに描かれているのは、樹木ではなく、トルコ人行政官である。

他の作品でも、前景のトルコ行政官やアテネの市民たちが描かれている部分が影になる一方で、後景の古代遺跡は光り輝いている。古代アテネの栄光に光を当てることで、今は廃墟となった現状を強調し、手前の影となるトルコ支配下の現実に目を向けさせる演出である。スチュアートは光と影を使い分けることで、古代アテネと近代アテネを対比させ、彼のメッセージを伝えようとしたのである。

## 4. おわりに

『アテネの古代遺物』で記載されたスチュアートによるアテネの記録は、現代のギリシャへの関心と呼び覚ますきっかけにもなった。この後、多くの紀行文や旅行ガイドで現代のアテネと古代アテネを結びつける文章が書かれるようになり、1821年から34年のギリシャ独立戦争でピークを迎える。

スチュアートのアテネを取材した風景画には、19世紀以降の写実主義絵画で行われたルポルタージュの傾向が見てとれる。理想風景画が主流だった時代に、現代を生きる人々に焦点を当て、彼らの生活をありのままに伝えたこれらの風景画は、実測図作家・建築家だけではないスチュアートの画家としての大きな功績である。当代最大の画家と言われたアントン・ラファエル・メンクス (Anton Raphael Mengs 1728-79) は、スチュアートを「天才的才能」を持った画家と称えている<sup>26</sup>。しかし、『アテネの古代遺物』のような風景画を、スチュアートは受注した仕事に生かすことはなかった。彼が手掛けた英国にある数多くの建築物や邸宅の内装デザインは、遺跡のモチーフの転用に終始している。スチュアートの最も有名な内装デザインであるスペンサーハウスの「壁画の間」 painted room (1758) においても、グロテスク装飾に挿入された絵画は風景図ではない。また、彼が手がけたウインブルドン・パーク Wimbledon Park の内装 (1785年に火災で焼失) や、実現しなかったケドルストン・ホール Kedleston Hall の内装のデザイン画を見ると、大型の神話画と庇護者の肖像画が構想されており、ここでも風景画を描くことはなかった。その他、家具調度品のデザインにおいても風景は登場しない。

『アテネの古代遺物』の風景画は、実測を目的とした画家の奇跡的な写実表現とも言える。「画家そして建築家」という両方の肩書を誇りとし、リアリズムを追求したスチュアートの風景画は、考

古学のみならず歴史学、民俗学そして美術史において再評価に値する。

[注]

- 1 グーピーは1714年5月17日から1715年5月2日までバーリントン卿のグランドツアーの同行画家として、大陸旅行をする。
- 2 Watkin (1982) p.14 本書は、考古学に関心を持っていた教皇ベネディクト XIV に献上され、スチュアートは教皇に謁見した。
- 3 本書は、王立建築アカデミーの創始者であるコルベールが、フランス人建築家向けに企画したもので、古代ローマの遺跡を正確に実測した最初の作品と言われている。初版では137点の銅版画が収録されている。
- 4 1749年、レヴェットが父親に送った手紙（現存せず）に記載。Watkin, op.cit., p.15
- 5 James Gray はスチュアートとレヴェットをディレクタント協会に紹介し、1751年に会員として推挙した。彼は、ヴェネチア駐在後、ナポリに移り、ヘラクランウムの発掘における主導的立場となった。Lione Henry Cust, *Dictionary of National Biography*, 1901 supplement/Gray, James (d.1773)
- 6 Joseph Smith は、二人のギリシャでの活動の安全をディレクタント協会のメンバーでコンスタンティノーブルの英国大使 James Porter に依頼した。
- 7 スチュアートとレヴェットの調査は不完全で、次号の出版には追加取材が必要だった。第1巻が好評を博したことで、ディレクタント協会は1764年から6年かけて好古家のリチャード・チャンドラー、レヴェット、画家のウィリアム・パースを、イオニアとギリシャに派遣し、この成果物としてチャンドラーの手により『イオニアの古代遺跡』（1769年）が出版されている。スチュアートはアテネに戻ることはなかったが、レヴェットによる追加の調査を基に『アテネの古代遺物』の続編の準備に取り掛かった。スチュアートは1788年に急逝するが、この図版とテキストをもとに1789年に第2巻が刊行され、その後1794年に第3巻、1816年に第4巻が刊行された。
- 8 Watkin, op.cit., p.18
- 9 Bryant, Julius James “Athenian” Stuart: The architect as landscape painter’, V&A online Journal, issue No.1 Autumn 2008, <http://www.vam.ac.uk/content/journals/research-journal/issue-01/james-athenian-stuart-the-architect-as-landscape-painter/>（最終閲覧：2022年11月24日）
- 10 Salmon, Franck, ‘Stuart as Antiquary and Archaeologist in Italy and Greece’, ed., Soros, Susan Weber, *James “Athenian” Stuart: Rediscovery of Antiquity*, 2007, p.118
- 11 Ibid., p.124, fig3-20,3-21
- 12 Ibid., p.120, スチュアートのスケッチは、James “Athenian” Stuart *Amphitheatre at Pola, Croatia*, 1750, 大英博物館オンラインコレクション：[https://www.britishmuseum.org/collection/object/G\\_1857-1212-6](https://www.britishmuseum.org/collection/object/G_1857-1212-6)
- 13 Ibid., p.119
- 14 Abbuthnott, Catherine, ‘The life of James “Athenian” Stuart’, ed., Soros, Susan Weber, op.cit., p.95, No.147, Nomination papers for Stuart, Archive of the Royal Society <http://www.royalsoc.ac.uk/lobrary/>
- 15 Bryant, op.cit. Bryant も指摘しているが、スチュアートの画家としての研究は、ほとんどなく、Salmon による論述（注10）に画家としての活動が記されている。
- 16 1378年に英国宮廷で設置され、主に王室所有の城や邸宅の管理や保全を行った。
- 17 「自由芸術家協会」(Free Society of Artists 1761-1783) は1760年に発足した「芸術家協会」(Society of Artists) の改称名。1769年に新しくロイヤル・アカデミーが芸術家協会から分離、設立した際に旧協会に残った画家たちは「自由芸術家協会」と改称し、1783年まで活動を続けた。
- 18 ヴィクトリア&アルバート美術館で開催されたジェームス・スチュアートの展覧会 ‘James “Athenian”

*Stuart: Rediscovery of Antiquity* (会期：2007年3月15日－6月24日)でスチュアートによる18点のグワッシュが初めて一堂に展示された。同展ではこの他、重要なスケッチやデザイン画が出品され、スチュアートを画家として再評価するきっかけとなった。

- 19 Bryant, op.cit.,
- 20 スチュアートは「ウェラーとスポンはハドリアヌスの水道橋としているが、おそらく貯水池の門である」と説明している。 *Antiquities of Athens*, vol.1, ix
- 21 Bryant, op.cit.
- 22 Watkin, David, 'Stuart and Revett: The Myth of Greece and its Afterlife', ed., Soros, Susan Weber, op.cit., p.118
- 23 Le Roy, Julien-David *Les Ruines des plus beaux monuments de la Grèce*, Preface, vol.1, 1770
- 24 ドーキンズとウッドは1751年にアテネを訪問し、後にパルミラとバルバックの遺跡についての本を出版する。
- 25 Bryant, op.cit.
- 26 Bryant, ibid., 引用元 Garlick, Kenneth and Angus Macintyre, eds. *The Diary of Joseph Farington*. New Havemnad London: Yale University Press, 1979, vol.4:1554.

#### 参考文献

- Black, Jeremy, *The British Abroad-The Grand Tour in the Eighteenth Century*, The History Press, Gloucestershire, 2011
- Bryant, Julias, *James "Athenian" Stuart as a landscape Painter*, Victoria & Albert Museum Online Journal. Issue No.1 Autumn, 2008, <http://www.vam.ac.uk/content/journals/research-journal/issue-01/james-athenian-stuart-the-architect-as-landscape-painter/>
- Clarke, M.L, *Greek Studies in England 1700-1830*, Cambridge University Press, Cambridge, 1945
- Cust, Lionel, *Society of Dilettanti*, Macmillan and Co.,Ltd, London, 1914
- Desgodets, Antoine, *Les edifices antiques de Rome dessinés et mesurés tres exactement sur les lieux*, Paris, chez Claude-Antoine Jombert, 1779
- Finnegan, Rachel and Mulvin, Lynda, *The Life and Work of Robert Wood*, Archaeopress Publishing Ltd, Oxford, 2022
- Ingamells, John, 'Discovering Italy: British Travellers in the Eighteenth Century', *Grand Tour- The Lure of Italy on the Eighteenth Century*, Tate Gallery Publishing, London, 1996
- Kelly, Jason M, *The Society of Dilettanti*, Yale University Press, New Haven & London, 2009
- Lassels, Richard, *The Voyage of Italy, or, A Compleat Journey through Italy*, John Starkley, London, 1670
- Le Roy, Julien-David *Les Ruines des plus beaux monuments de la Grèce*, Paris, 1770
- Nugent, Thomas, *The Grand Tour: a Journey through the Netherlands, Germany, Italy and France*; with an introduction by Robert Mayhew, Ganesha, London, 2004
- Ousby, Ian, *The Englishman's England. Taste, Travel and the Rise of Tourism*, Cambridge University Press, Cambridge, 1990
- Redford, Bruce, *Dilettanti*, J.Paul Getty Museum, Los Angeles, 2008
- Schulz, Max F, *Paradise Preserved*, Cambridge University Press, Cambridge, 1985
- Soros, Susan Weber, ed. *James "Athenian" Stuart 1713-1788 Rediscovery of Antiquity*, Yale University Press, New Haven & London, 2007
- Spon, Jacob & Wheler, George *Voyage d'Italie, de Dalmatie, de Grece et du Levant fait aux annees 1675 &*

- 1676, *A La Haye Chez Rutgert Alberts 1724*
- Stanford, W.B. and Finopoulos, E.J. eds, *The Travels of Lord Charlemont in Greece & Turkey 1749*, Trigraph, London, 1984
- Stuart, James and Revett, Nicholas (voll:1762, vol.2:1789, vol.3:1794, ed. Salmon, Frank, *The Antiquities of Athens Measured and Delineated by James Stuart F.R.S. and F.S.A. and Nicholas Revett Painters and Architects*, Princeton Architectural Press, New York, 2008
- Towner, John, *An Historical Geography of Recreation and Tourism in the Western World 1540-1940*, John Wiley & Sons, Chichester, 1996
- Tregaskis, Hugh, *Beyond the Grand Tour*, Ascent Books, London, 1979
- Watkin, David, *Athenian Stuart Pioneer of Greek Revival*, George Allen and Unwin, London, 1982
- Wheler, George *Journey into Greece*, London, 1682
- Winckelman, Johann Joachim, ed. Irwin, David, *Writings on Art*, Phaidon, New York, 1972

#### 図版クレジット

- 図3 South view of the Temple of Artemis Agrotera in Agrae (Panagia stin Petra) in Athens, STUART, James, and Nicholas REVETT. *The Antiquities of Athens measured and delineated by James Stuart F.R.S. and F.S.A. and Nicholas Revett painters and architects*, 1762. Aikaterini Laskaridis Foundation Library  
<https://eng.travelogues.gr/item.php?view=48023>
- 図4 Street in Athens. In the background the Gate of Athena Archegetis (mod. Pazaroporta), STUART, James / REVETT, Nicholas. *The Antiquities of Athens measured and delineated by James Stuart F.R.S. and F.S.A. and Nicholas Revett painters and architects*, vol. I, London, John Haberkorn, 1762. Aikaterini Laskaridis Foundation Library  
<https://eng.travelogues.gr/item.php?view=48015>
- 図5 View of the temple of Hephaestus in Athens, STUART, James / REVETT, Nicholas. *The Antiquities of Athens measured and delineated by James Stuart F.R.S. and F.S.A. and Nicholas Revett painters and architects*, vol. III (ed. Willey Reveley), London, John Nichols, 1794. Aikaterini Laskaridis Foundation Library  
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:A\\_View\\_of\\_the\\_Temple\\_of\\_Theseus\\_-](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:A_View_of_the_Temple_of_Theseus_-)
- 図6 Vue du temple de Thésée à Athènes, Le Roy, Julien David *Les ruines des plus beaux monuments de la Grèce*, 1770, Aikaterini Laskaridis Foundation Library  
<http://eng.travelogues.gr/travelogue.php?view=190&creator=849456&tag=8882>
- 図7 Temple of Erechtheus, Minerva Polias, Pandrosus, STUART, James / REVETT, Nicholas. *The Antiquities of Athens measured and delineated by James Stuart F.R.S. and F.S.A. and Nicholas Revett painters and architects*, vol.II, London, John Nichols, 1787. Aikaterini Laskaridis Foundation Library  
<http://eng.travelogues.gr/collection.php?view=174>
- 図8 The monument of Philopappus in Athens. STUART, James / REVETT, Nicholas. *The Antiquities of Athens measured and delineated by James Stuart F.R.S. and F.S.A. and Nicholas Revett painters and architects*, vol. III (ed. Willey Reveley), London, John Nichols, 1794. Aikaterini Laskaridis Foundation Library  
<https://tr.travelogues.gr/item.php?view=49272>
- 図9 A view of the Tower of the Winds, James Stuart & Nicholas Revett. *The Antiquities of Athens measured*

*and delineated by James Stuart F.R.S. and F.S.A. and Nicholas Revett Painters and Architects*, vol. III (ed. Willey Reveley), London, John Nichols, 1794, Aikaterini Laskaridis Foundation Library  
<https://eng.travelogues.gr/item.php?view=48033>

上記全て Wikimedia Commons / Public Domain